

「この一筋につながる」(芭蕉)の意味

— 宗教的世界観の呪縛とそれからの解放 —

井 手 恒 雄

芭蕉は、晩年に述懐して、

つひに無能無才にしてただこの一筋につながる。

(『笈の小文』)

と言っている。

わたしは、かつて芭蕉を論じたときに、この「この一筋につながる」を、なにげなく「ついに無能無才のままに、俳諧の道一筋につながれている。」と、現代語訳しておいた。

ところが、あとで気づいたことであるが、世間にはこれをそう解しない人が多いようである。つまり、これを「俳諧というものに命をかけて、ひしととりすがっている。」というふうに受けとっている人が、意外にも多いように思われるのである。

つい最近、目についたものに、次のようなものがある。

「芭蕉にも『無常迅速』はあった。『無常の観、猶亡師の心なり』(『黒冊子』)。しかし、それは中世の詩人たち

とすでにどこかで違っている。芭蕉にとって俳諧への執着は、『風稚の魔心』(栖去之弁)であり、『仏の妄執』(『笈日記』)ですらあった。魔心といい妄執というとき、そこに仏道がある。しかしそこにまた分離がある。しかもその分離した風稚の魔心に彼は無能無才にしてつながろうとするのである。(広末保氏「中世詩と芭蕉」、『中世文学の世界』所収)

この人の場合、「ひしととりすがっている」というほどに強いものであるかどうか、はっきりしないが、要するに「つながれている」でなくて、「つながろうとするのである」なのである。「とするのである」というところが、どういうわけでそう言えるのかわからないが、右の文は現代語訳を目的としたものではないから、それでよいとしよう。とにかく、「つながる」は一つの動詞であって、「とりすがる」に近い意味のものとされていることに、まちがいはないようである。

わたしは、「つながる」を、「つなぐ」という一つの動詞に、受身の助動詞「る」の添うたもので、意味は最初に

記したように「つながれている」であると思うのであるが、一体どちらが正しいのであろうか。

わたしは、「この一筋につながる」を「つながっている」とか「とりすがっている」とかの意に解するのは、常識の誤りであると考ええる。それはしかも、日本文芸に関する学問の上で重要な問題を含む誤りであると考ええる。そのことについて、簡単に述べてみたい。

これもあとで調べて気がついたことであるが、日本古典文学大系『芭蕉文集』の『笈の小文』の頭註に、「この一筋につながる」の訳として、ちゃんと「俳諧の道一筋にしばらく」とある。「つながる」を「とりすがる」でなく「つながれる」であるとするのが、わたしひとりの風変わりな提案でもなく、独断でもないことが、これでわかるというものである。

ついでに言うと、同じ古典文学大系『芭蕉文集』に紹介されている二種の『幻住庵ノ賦』（『幻住庵記』の草稿のよきな性質のものと考えられる。）を見ると、二種とも「つひにこの一筋につながれて無能無才を恥づるのみ」とある。「つながれて」は、われわれの当面の課題である「つながる」の意味を解く鍵でなければならぬ。この「つながれて」の一語を参考にするとき、「つながる」は当然「つながれている」あるいは「しばらく」になるのではあるまいか。

「この一筋につながる」を「つながっている」とか、

「とりすがっている」とか解する常識の誤りの中に、日本文芸に関する学問の上の重要な問題が含まれているというのは、こうである。

芭蕉自身が、一生俳諧などというものにしばらくはいるという意識を持っていた事実を、全く知らないか、あるいは知っていても無視しようとする人が、多いのではあるまいか。芭蕉のことだから、俳諧というかれ自身の芸術に大きな誇りを持ち、その芸術に生命を賭する決意を持っているにちがいないと、安易に考えている人が、多いのではあるまいか。いってみれば、現代人の立場から類推するばかりで、芭蕉の芸術家としての矛盾など、全く想像もできない人が、あまりにも多すぎるのではあるまいか。そういう無知とか誤解とかが、「この一筋につながる」を、何か芸術家としての芭蕉の得意の発言でもあるかのように受けとる結果を生んだのであるまいか。それは、芭蕉だけでなく、日本文芸の根本を見誤るといえるものではあるまいか。

わたしは、右の常識の誤り自体を日本文芸に関する学問の重要問題として、追究してみたいと思うのである。

二

芭蕉自身が、俳諧の道にしばらくはいるという意識を持っていたというのは、日本文芸の歴史上、むしろ当然のことである。われわれの芭蕉に対する理解の第一歩は、この当然のことを当然のこととして認めることでなければなら

ない。

みづから申されけるは、はた生死の転変を前におきながら、ほつ句すべきわざにもあらねど、よのつねこの道を心にこめて、年もやや半百に過ぎたれば、いねては朝雲暮烟の間をかけり、さめては山水野鳥の声におどろく。これを仏の妄執といましめ給へる、ただちに今の身の上におぼえ待るなり。このちはただ生前の俳諧を忘れむとのみおもふはと、かへすがへすくやみ申されしなり。(『笈日記』)

これは、弟子の支考の筆録と伝えられるものである。これによるかぎり、芭蕉は、俳諧そのものを仏が妄執として戒め給うたところのものであるとし、死に至るまでいわゆる風雅の道に執着する自分自身を悔いているのである。

(前掲広末氏の文章の中で、芭蕉にとって俳諧が「仏の妄執」であったとのべられているが、これはとんでもない誤りである。仏が、俳諧などというものは妄執だと戒めたというのである。)

もし、芭蕉のような人が、自分自身の芸術についてそれほど懐疑的であったとは思えない、というようなことを言う人があれば、それは、日本文芸の歴史、あるいは日本における文芸観の歴史を、知らないというものである。日本には古来文芸あるいは文芸的なものを、仏教的立場から軽

視、あるいは蔑視する、悪い伝統があった。その伝統の呪縛の中で、芭蕉は、たとえば中世の藤原俊成がそうであったように、自分自身の芸術に対する疑惑を告白したのである。

人も知るとおり、俊成は老後に及んで、自分は朝暮和歌だけ詠んでいて、仏道の勤めを怠っている、これでは後生菩提が危ぶまれる、というので、住吉社に参籠して、「もし歌はいたづらごとならば、今よりこの道をさしをきて、一向に後生のつとめをすべし。」と、祈念した。この場合は、和歌仏道全く二なしという注目すべき神託を蒙って、安心して歌道に精進したというのであるが、とにかく俊成の時代には、和歌あるいは広く一般的に文芸的なものを以って後生の妨げとする思想が、支配的であったのである。芭蕉その人も、この中世以来の宗教的世界観の呪縛を免れることはできなかつた。それが、死に臨んで「俳諧を忘れない」という告白となった。われわれは、その芭蕉の心境をそのまますなおに受けとることによって、「この一筋につながる」の真意をも知ることができると思うのである。

旅に病んで夢は枯野をかけめぐる、また枯野をめぐるゆめ心地、ともせばやと申されしが、是さへ妄執ながら、風雅の上に死なん身の道を切に思ふなりと、悔まれし。

(『枯尾花』)

これは、其角の記録と伝えられるものであるが、ここにも俳諧を「妄執」としてひどく恐れる芭蕉の気持がうかがわれる。

人によっては、この『枯尾花』の一節を以って、芭蕉が俳諧の一筋の道を切実に守っていた証拠だとし、それから「この一筋につながる」を「この俳諧一筋を大切にしている」と見る先入観を養い育てかねないかもしれない。しかし、われわれの重要な問題は、芭蕉が俳諧を大切にされたか否かではない。もしそうであるなら、かれが俳諧を身にかえて大切にしたということは、争う余地のない明白な事実である。そうでなくて、問題は、芭蕉において俳諧が真実どう意識されていたか、である。その解答としては、芭蕉という人は死ぬまで俳諧を妄執と観じ、それにとらわれて一生を過ごす自分を悔いていた、少くとも言葉の上ではそう言っていたと、言うよりほかないと思う。それが「……悔まれし」の一語を、そのまますなおに受容し得るところの理解の仕方であり、それがまた「この一筋につながる」を、そのままに受けとることのできる研究態度でもあると思うのである。

芭蕉が「俳諧を忘れむとのみおもふは」と言ったというのは、どういうことであろうか――。

それは、どういうことであろうか、などというようなことではなく、ただ文字どおり、言葉どおりに、俳諧のようなものをおぼふはと、かへすぐくやみ申されし也』と記し

い。その、あたりまえのことを理解するためにも、われわれは、俳諧（一般に文芸的なもの）が、真実仏の戒める妄執であると観ぜられた、中世以来の文芸観の歴史の現実を、認識する必要があると思う。芭蕉が「俳諧を忘れたい」などと本気で考えたはずがない、というような反歴史的態度が、同じように芭蕉が「自分は俳諧につながる」「しばられる」などと言うはずがないという、根づよい誤解につながるものであることを、知る必要があると思う。

芭蕉が、普通の意味で「俳諧を忘れたい」などというはずがないという先入観が、どのように恐るべき錯乱を生むか、それは次のような場合に明らかになる。

（およそ古文芸の表現を文字どおりに理解することが、いかに困難であるか、それゆえにまた、まず以って古文芸の表現を文字どおりに理解しようとする努力が、われわれにとっていかに大切であるか、わたしはここで痛感させられるのである。）

ある人が、芭蕉の「忘れむとのみおもふは」について、次のように言っている。

「芭蕉が死に臨んで生前に命をかけた俳諧を忘れようとのみ思ったということは、まことに容易ならぬ芭蕉の心境と思うのであり、支考は芭蕉が自から述べたであろう言葉をそのまま書きとめて『此後はたゞ生前の俳諧をわすれむとのみおもふはと、かへすぐくやみ申されし也』と記し

ているのであるが、支考は「申されし也」とのみいついて、芭蕉が俳諧を忘れようとしたことの心境を解していないように思えるのである。このことは、其角にしても同じことであり、芭蕉が悔いたというその意味を解していないと思わざるを得ないのである。」（古田紹欽氏「芭蕉のさとり」角川刊・校本芭蕉全集・月報第一号）

それでは、芭蕉が悔いたというその意味は、どうなのか。この人はつづいて言う。

「芭蕉は俳諧の究極を俳諧を忘れることにあると見たのであり、成程、芭蕉は風雅の妄執に悩んだのであるが、妄執に悩んでいる自分を眺め得ているのであり、その眺め得ているところに、俳諧に執着して俳諧を忘れているものを見ているのである。妄執とまでいつている盲目的な執着のなかに初めて執着を越えたものを見出しているのである。なまはんかな執着ではどこどこまでも執着してやまない。執着をたちきることは、執着に徹底する路はないのである。執着というものは断ち切ろうとすればする程、強靱な執着となるのである。芭蕉は妄執によって初めて執着を突破したのである。」（同右）

この人によると、芭蕉が俳諧を忘れたと言ったのは、俳諧を忘れることが俳諧の極意だからである——。これは乱暴な論理である。論理にならぬ論理である。（文章の一部に誤植があるかもしれない。）

この人の発想に対するわたしの批判は、こうである。

この人は、根底において仏教的立場に立つ人らしく、日本文芸史上における仏教のマイナスの役割が理解できないでいるのである。前に述べた、日本には古来文芸あるいは文芸的なものを、仏教的立場から軽視、あるいは蔑視する、悪い伝統があったという事実を、認識し得ないでいるのである。その悪い伝統の悪い伝統である所以のものを、はじめから把握し得ない立場にあるのである。芭蕉の生涯をかけたたたかいが、仏の名において俳諧を妄執視する宗教的世界観に対して、人間性を解放しようとしてあがく、それであったことを知る以前に、何が何でも仏教風の悟りが芭蕉の芸術を高めるものであったにちがいないという錯誤に陥ってしまったのである。もともと普通に考えて、俳諧に執着しているということ、その俳諧を忘れたということとは、別のことであるはずである。それを、「俳諧に執着して俳諧を忘れていくもの」というような觀念の作為の中で一つにしてしまおうというのは、無理である。それも芭蕉が、俳諧を妄執視する古い仏教の偏見に負けて「俳諧を忘れたい」などといった事実を予想することのできない、現代の仏教徒の立場がそうさせた無理である。

芭蕉は実際、俳諧は仏の戒める妄執であるという偏見を肯定する立場に自分の身を置き、その妄執に促えられていく自己を悔い、俳諧を忘れたいと漏らしたのである。どうしてそういうことが言えるかというよりも、そう解せざるを得ない芭蕉の語なり、弟子の言い伝えなりなのである。

それ以外のことは、よほどの曲解を敢えてしないかぎり、考えられないと思うのである。

芭蕉において、俳諧が、妄執は妄執ながらに、今日の意味における偉大な芸術であり得たことは、まちがいのない事実である。しかしそのことは、芭蕉が俳諧を「忘れむとのみおもふは」と言ったとか、「悔み申され」たとか伝えられる、その普通の言葉の意味まで変えて考えてみなければならぬことではないと思うのである。

俳諧という、仏によって戒められるところの妄執に、自分は生涯とらえられているという、芭蕉の抜きがたい自己呵責——、それが、俳諧の一筋に「つながれている」とか「しぼられる」とかいう、かれ自身の述懐につながるものであると思うのである。

三

芭蕉の生涯のたたかいは、俳諧を妄執視する宗教的世界観の呪縛から、人間性というものを解放しようとしてあくまでそれであった——。

この事実を納得することは、多くの人にとって予想以上に困難であるらしい。

ある人の、同じ芭蕉の自己矛盾に関する論文が、その間の事情をよく物語っているようである。

まず曰く——

「生死の転変を前に置いて、夢は枯野を駆けめぐるとの句

を案じて心をうばはれ、『いねては朝雲暮烟の間をかけり、さめては山水野鳥の声におどろく。』と、夢うつゝの中にも自然を彷徨せざるを得なかつた芭蕉は、今は妄執としか思へない風雅の魔心に我ながら恐らしさを感じたにちがひない。かくして風雅にとりつかれて一生の間身心をせめ通し魂をけづつて来た彼は、死に臨む間際までも、仏の説くやうな一切を放下した境地にはなり得なかつたのである。」（木藤才蔵氏「無常感と文学の問題——その歴史的考察——」国語と国文学一九四九・二）

ここでは、まず以って芸術家としての芭蕉の現実が、大體正確に把握されている。

もともと、芭蕉と仏教との間には、かなりの距離があった。仏の妄執と戒め給う俳諧にふけり、風雅の魔心を狂わせる芭蕉が、仏教と相即の関係にあるわけはなかつた。その芭蕉が、死に臨む間際まで、仏教でいう一切を放下した境地にはなり得なかつたという、この人の観察は正しい。問題は、そのうちである。その、芭蕉と仏教との間にあるかなりの距離というものは、結局どうなるというのであるうか。

この人は、すぐつづいて曰く——

「しかし芭蕉の生涯——特にその晩年は、実に宗教的である。結局、平安末期このかた幾多の詩人文学者の心をなやませた宗教と文学の矛盾対立は、芭蕉に至って真の意味で止揚されたといひうるのではないか。それは死に至るま

で鋭い対立のけはひを秘めたまゝで統一されて行ったのではないか。」(同右)

ここで、芭蕉の矛盾が、「平安末期このかた幾多の詩人文学者の心をなやませた宗教と文学の矛盾対立」としてとらえられているのは、歴史的に正しい把握であると思う。前述の、俊成の懐疑として伝えられるところのものが、元祿の芭蕉にまで続いたのである。問題は、その矛盾対立が結局どのようにして解消せしめられたかである。厳密に言つて、どのようにして解消せしめられたとわれわれが予見すべきか、であると思うのであるが。

死に臨む間際まで、仏教の至上境には至り得なかつたといわれた芭蕉が、そのまま「実に宗教的である」といわれるのは、どうしてであろうか。宗教と文学と、この容易に一つになりそうにもない二つのものが、芭蕉に至つて真の意味で止揚されたというが、どうしてそういうことが言えるのであろうか。

わたしが思うに、俊成以来の(あるいは遠くそれ以前からの)宗教か文学かの矛盾対立は、文芸上の仕事に従事することを以つて何か罪深い仕業であるかのように考える、仏教の側の偏見が、歴史的に解消せしめられるに従つて、おのずから解消せしめられるべきものであつて、それ以外に解消の道のないもののようなものであるが、この人はその種の仏教の偏見を突くことなくして、その解消の可能性を信じるといふのであろうか。

わたしが思うに、文芸の仕事に従事することは、昔から後生菩提の妨げと考えられ、芭蕉すらその偏見の重圧から免れることができなかった——、ただそれだけのことなのである。今日の感覚で考えると、自己の芸術に高いプライドを持っていたであろうと想像されかねない芭蕉が、実は自虐的と思えるほどに芸術家としての自己を軽んじていた——、それがやむを得ない歴史上の現実なのである。ところが、真実仏教がそのように重大な偏見の要因であつた事実が認識されない場合、そのほかならぬ仏教と、文芸との融合というようなことが、それほど容易なことだと考えられ、芭蕉において実際には和解しがたい二つのものが「鋭い対立のけはひを秘めたまゝで統一されて行った」などと片づけられてしまい、何ら怪しまれないですむらしいのである。

芭蕉が宗教的であつたということについて見てみると、この人は次のように言うのである。

「芭蕉をして真の芭蕉たらしめたものは、『ある時は仏籬祖室の扉にいらむ』と決意せしめた宗教的な欲求であり、かゝる欲求はまったく現実の生活に魂をうばはれてゐたかのごとき『貝おほひ』の時代においてすら既に潜在していたと見るべきであろう。しかも芭蕉は遂に仏籬祖室のとほそに入らずにしまった。そしてその宗教的な欲求はかへつて風雅の道に参ずることによつてみだされたと考へることが出来るのであるが、そのことは如何にして可能であ

ったか。」(同右)

これはいうまでもなく、芭蕉の『幻住庵記』の文章に基づいての発言であると思われるが、一体どうしてこのようなことが言えるというのであろうか。

強い「宗教的欲求」を持つ一人の人間が、ついに仏門に入らずにしまったというのは、どういうことであらうか。その人間の「宗教的欲求」が仏教によらず、仏教以外のものでみたまされたというのは、どういうことであらうか。

同じ「この一筋につながる」の語を持つ、有名な『幻住庵記』の一節をかかげる。

つらつら年月の移りこし拙き身の科を思ふに、ある時は仕官懸命の地をうらやみ、一たびは仏籬祖室の扉に入らむとせしも、たどりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞じて、しばらく生涯のはかりごととさへなれば、つひに無能無才にしてこの一筋につながる。(『幻住庵記』)

この一節から、芭蕉は一生強い宗教的要求を持ちつづけたとか、芭蕉の生涯、特にその晩年が実に宗教的であったとか、言えるであらうか。

これからそうは言えないと思う。

ここには、芭蕉が俳諧にふけることによって仏道に背くことを強く恐れる気持があるだけであって、これから、芭蕉が宗教的であったとか、芭蕉の芸術がそのまま仏道の悟

りに通じるものであったと言おうとするなら、それは、芭蕉の語をその表現どおりに受容しようとするものではないといわざるを得ない。

(前に、古文芸の表現を文字どおりに理解しようとする努力が、われわれにとっていかに大切なものであるかを、痛感させられると書いたが、ここでも同じことを言わねばならないようである。)

わたしは、この一節で格別注意を要するのは、「一たびは仏籬祖室の扉に入らむとせしも」の一語であると思う。この一語から、芭蕉に関してどういうことが言えるか、どういうことが言えないか、それをわれわれは注意ぶかく考えてみる必要があると思う。

「一たびは仏籬祖室の扉に入らむとせしも」から言えることは、どういうことであらうか。

それは文字どおり、若き芭蕉が一度は仏門に入ろうとしたことがあるということである。仏門に入ろうとしたが果たさず、結局は生涯を俳諧の道にささげることになってしまったということである。芭蕉には、ついに仏門に入り得ず、いわゆる風雅の魔心に身を狂わせて一生を無為に過ごす歎きがあったが、所詮かれは、たとえば栄西とか道元とかいう人がそうであり得たようには、仏道の人であり得なかつたということである。栄西とか道元とかなら、俳諧のごときものは浮世のたわむれとしてはじめから眼中に置かなかつたであらうが、芭蕉はそういう人ではなかつたとい

うことである。

「仏籬祖室の扉に入らむとせしも」から言えないことは、どういふことであろうか。

それは、芭蕉が生得仏道の人であったとか、かれの芸術がそのまま仏教の奥義に通じるものであったとかいふことである。

芭蕉は所詮仏門の人ではあり得なかつたが、その深遠な芸術境を通して見るとき、かれは仏門の人以上に仏道の神髓を体得した人であつたと言える、というよふなことを言う人が、世間には多いと思われるが、その考え方は危険であると言いたい。何が危険であるかというに、そういう考え方は必ずしも芭蕉の語の一つ一つを忠実に踏まえたものでないからである。われわれ古文芸の学問的研究に従事する者の仕事は、たとえば芭蕉の場合、芭蕉の語、あるいは芭蕉に関して述べられた語の一つ一つについて、言えることと言えないことを明らかにし、そうして得たところのものを積み重ねて、そこに一つの真理の体系を作り上げることであると思うが、そういう人においては、そこに書かれて見ることが見逃され、そこに書かれていないことが附け加えられている恐れがあると思うのである。実際、芭蕉が言っていることは、仏門に入らずにしまったというだけのことであつて、仏門には入らなかつたが、俳諧によつて得たものはそれ以上のものであつた、というよふなことではないと思ふのである。

「この一筋につながる」の真意を求めてここに至つたが、要するに芭蕉は、少くとも言葉の上では仏が妾執と戒める俳諧にとらえられて一生を空費する自己を悔いていたのである。自分が生涯仏道からはずれた存在で終ることを恐れていたのである。その芭蕉について、何を悔いたり恐れたりする必要があろう、かれの芸術がそのまに仏道であつたではないかと考へる人があれば、それは現代人の感覚で以つてみだりに芭蕉ならぬ芭蕉の映像を偽造するものであると思う。その誤りがそのまま、俳諧につながれている自分を悔いる芭蕉を、俳諧一筋の誇りに生きる芭蕉に作りかえてしまふ誤りであると思う。(一九六三、一、七)

— 本学教授 —